

ジェームズ L. オシュマン (James L. Oschman)

スイス出身の学者でアメリカのピッツバーグ大学から生物物理学 (Biophysics) と細胞生物学(Cell Biology)の研究分野で学位を取得した。

卒業後も各国の大学や科学技術の施設を訪問し講演し、研究を続けられた。エネルギー医学に関する論文をたくさん書かれておられる。代替医学や補完医療にも興味を持ちエネルギー医学の知識をこれらに応用している。

エネルギー医学に関するオシュマンから二冊の本が邦訳されている：



1. エネルギー医学の原理, ジェームズ L.オシュマン著
(Energy Medicine, The scientific Basis, By James L. Oschman)

2. エネルギー療法と潜在能力
(*Energy Medicine in Therapeutics and Human Performance*)

オシュマンに関する HP:

<http://www.energyresearch.bizland.com/>

<http://unjobs.org/authors/james-l-oschman>

エネルギー医学の原理, ジェームズ L. オシュマン 著
(Energy Medicine, The scientific Basis, By James L. Oschman)

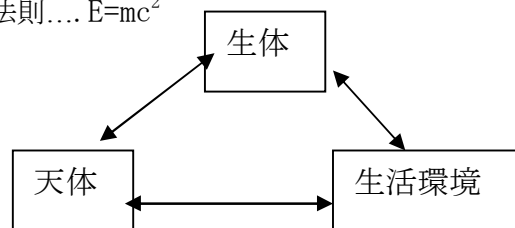
(文責 J. ジャムシデイ)

定義：エネルギー医学＝振動医学（波動の医学）＝生物物理学：生体の機能を量子物理学的なアプローチで理解し説明するという学問である。

通常、生体の構造（分子、細胞、組織、器官など）と機能（生物性的な、精神性的な）がニュートン運動法則に基づいた物理学や生化学や生物学により説明される。今までの科学「機械論」的なアプローチでは説明できなかった「生命力」、「治癒力」（生理的調和又は体内時計＝神秘的な生体のコミュニケーション）をエネルギー概念（生命論）の応用により説明できる試みである。または部分論に対して全体論的な主張の試みである？

始めに：目に見えない神秘性のある力（エネルギー）の客観性について、

1. エネルギーの形態：電気、磁気、音、熱、光、レーザー光線、X-線、宇宙線、ハープ、アロマ等、力学、重力、生体機能・意識のようなエネルギー形態のすべてが波動である。
2. 電気エネルギーの性質：a) 周波数/s（低＝5～1000Hz、超低＝1-100Hz、極超低＝100Hz以下、熱を発する高周波など）、b) 波の振幅（強さ）、c) 干渉（同調化または共鳴、シューマン共鳴）、d) コヒーレント（内的/外的な一貫性）、
3. エネルギーの存在：生体—環境—地球—大気圏—宇宙...相互関係を保っている。
4. エネルギーの保存法則... $E=mc^2$



総論：「電流が導体を伝って流れるとき、その周囲の空間に磁場が生じる」。

磁場エネルギーを利用すれば新たな電流を流すことができる。あるコイルに電気を流すと磁場に並べた別のコイルに電流が発生する（図1）。

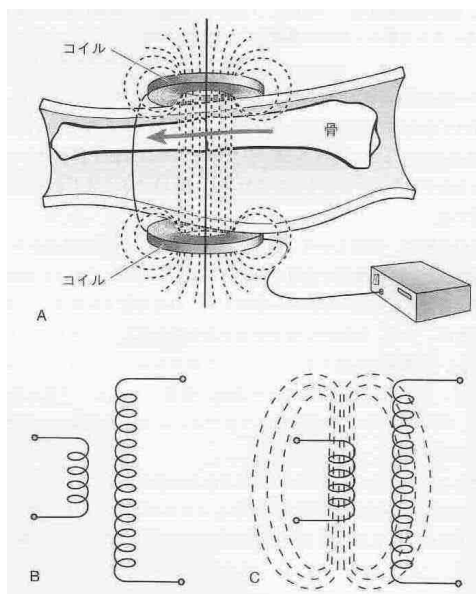


図1

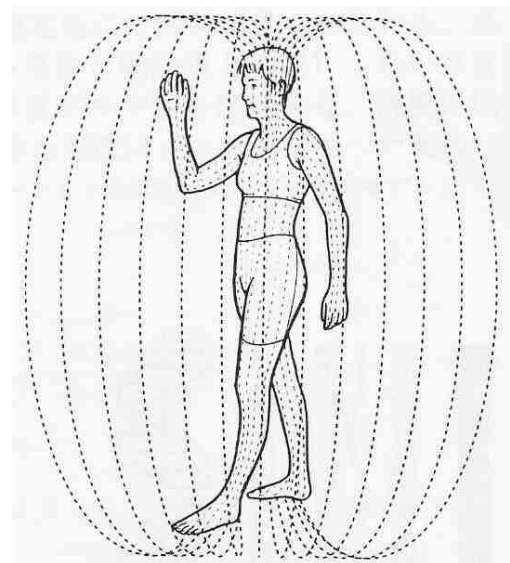


図2 人体全体からの磁場形態

エネルギー場には境界がないと言うのが、物理学の常識である。しかし磁気エネルギーは距離とともに弱まっていく。

量子物理学の発見により電子が絶縁膜を通り抜ける。この現象をトンネル効と呼んでいる。電子が量子物理学では粒子でありながら波であるので不可能な運動も波には可能になると言うわけだ。

人体の各部分より電流が流れ誘発磁場を作る（図2）。人体周囲の磁場の主要因が心臓の電流によるものと考えられる。脳の電気活動による頭部からの磁場が形成されると考えられる。電気活動を心臓の場合 EKG(心電図)で脳の場合には EEG(脳波)、EMG(脳磁波図)などで確認できる。

ヒーラーのセラピューティック・タッチの手指先から 7ー8 Hz (0.3Hzー30Hz) 磁波が放出される。

各論：

生体：a) 分子・細胞レベル：分子とレセプターとの直接的結合（ビリヤードボール説）だけでなく電磁場シグナルにより分子の情報が細胞に伝えられ細胞の機能が始まる（図3、4）。

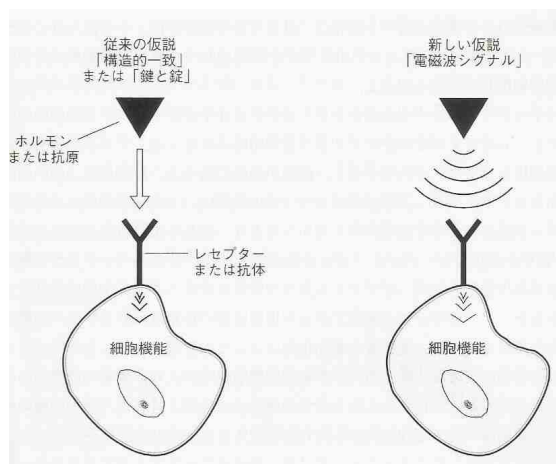


図 3

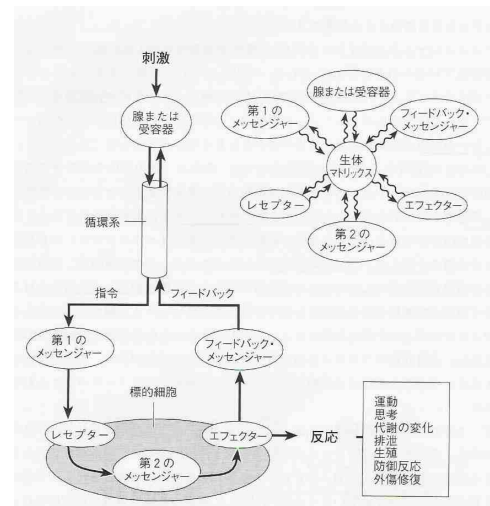


図 4

このような情報の伝わり方が細胞の内外、組織全体にも認められる。（圧電気効果と流動電位によって組織に電気が発生する。）

生体の中には情報がデュアル(dual)（二元的）メカニズムにて伝導される。組織が導体であり、半導体である。

神経線維...導体（デジタルシステム）：神経線維の直接的接触（シナプス）により帯電変化にて情報が早くつたわる。点と点を結ぶ。

神経細胞周囲組織...半導体（導体と絶縁膜との間）...思いのまま情報を伝導させる（アナログシステム）。気質ゲルや水を媒体する。情報の伝達がゆっくりですが一定の方向性なくあらゆる部位にメッセージをつたえる。...グローバルシステムの仕組み、「導体：ローカリゼーションモデル」対「半導体：プロセスモデル」

生体：b) 組織・臓器レベル：神経のみならず筋、血管、骨、等の結合組織が器官の支持組織として器官の修復、再生、維持に貢献する。細胞外基質がこの役割を果たす。細胞外基質が細胞（神経、筋、骨、等）芽細胞により産生される（図5）。臨床では長引く骨折治療

には電気刺激を応用する。この方法により骨折の修復が早まる。

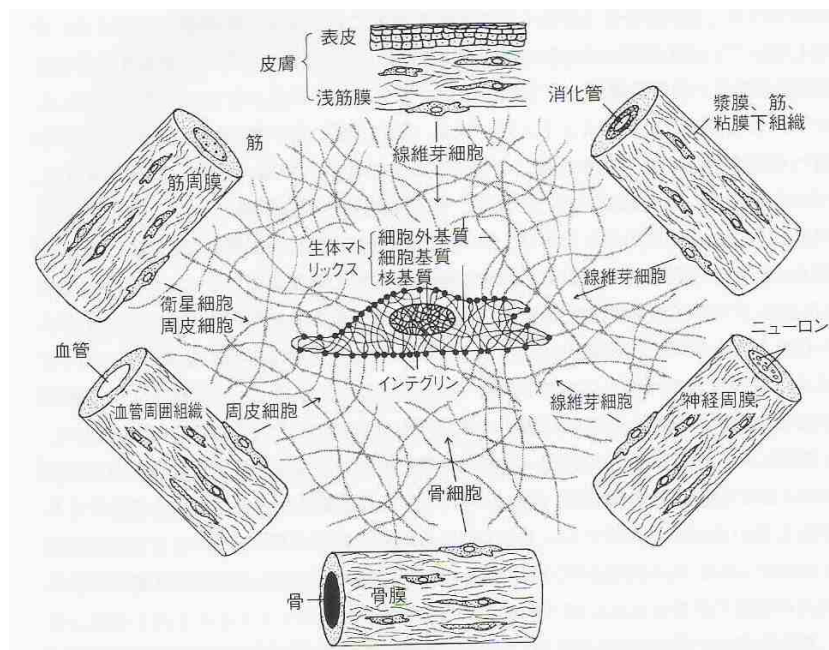


図 5

各組織の分子（五感のすべて）の秩序のある配列がセンサー（電波望遠鏡のアレイアンテナ）のようなものである。「らせん状の形態を保った細胞膜のリン脂質、結合組織のコラーゲン、網膜の神経細胞、筋肉の筋線維、有随神経（ミエリン）（DNA, Keratin, Collagen, Elastin, Actin, Myosin）の全てが(図6)あらゆるエネルギーの形態を振動に変えて伝達する。分子あるいは細胞の秩序ある配列が互いの振動（コーヒレント振動）により可能となりそしてそれぞれの螺旋状の形態が振動の伝達をより可能にするためである。

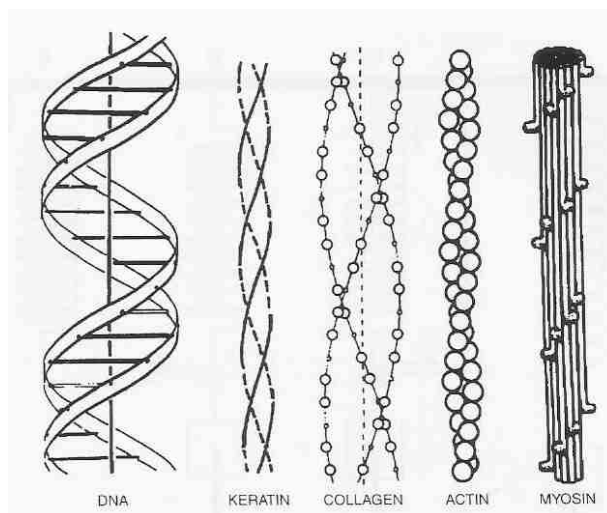


図 6

エネルギーの吸収、増幅、伝達：生体にセンサーがあるのでエネルギーを吸収し、増幅して伝える。 エネルギーの吸収・増幅・伝達が体内、体外そして体内外間に起きる。

エネルギーが伝わる時に増幅される（網膜の返納を考える）。マクロのレベルではテンセグリティという性質がエネルギーの吸収・増幅・伝達に役だっている。圧縮材（骨、脊椎）と引っ張り材（腱、靱帯、筋膜）の仕組みにより振動を吸収し、伝える（図7）。各組織がインテグリン（接着剤）（図5）にて互いに連結する。

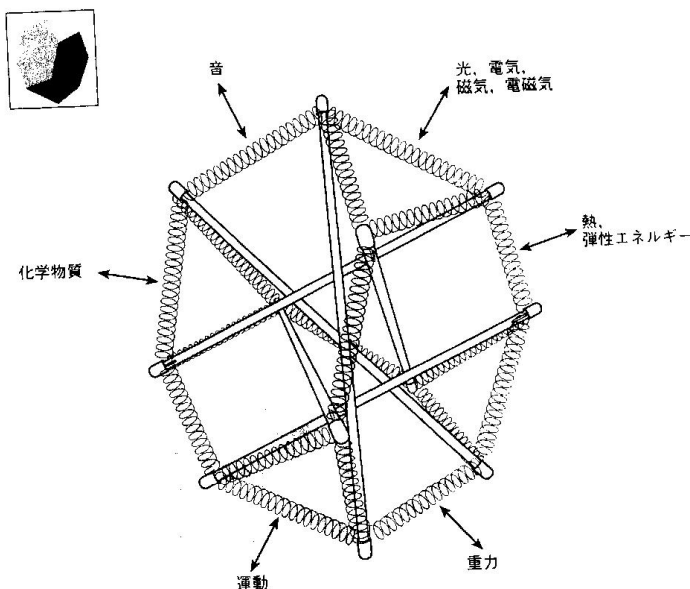


図7 圧縮材と引っ張り材の結合のモデル

生体がエネルギーの「ウィンドウ」にあてはまるエネルギーだけに反応するのである。それは極超低周波領域（周波数6～20Hz，強度0.1 マイクロボルト/cm）のエネルギーにもっとも大きな反応を示す。

電磁波治療器、針治療、therapeutic touch 等。

地磁気： 地磁気の変動周期（体外時計）は様々なサイクルが確認されている。地表には主に2種類の電磁波が検出される。

1. 雷の高周波（磁気嵐）、
2. 定常波（地磁気微脈動）...シューマン共鳴で発生する...7～10Hz（人間の脳波の平均周波数にほぼ等しい）：電離層で跳ね返されて地表にあたり、地表で跳ね返されて電離層に当たると言うパターンを繰り返す（図8）。

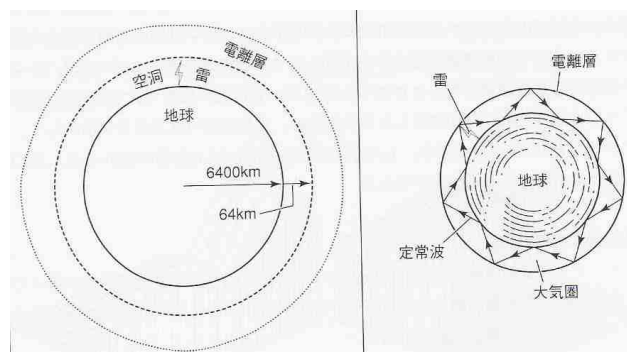


図 8

シューマン共鳴で発生された定常波が人間の磁波と同調し、セラピストの手先から放出される電流...修復作用（図 9）、占星術？、人と人の磁場干渉（図 10）

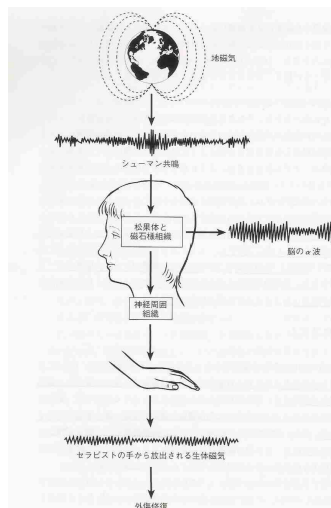


図 9

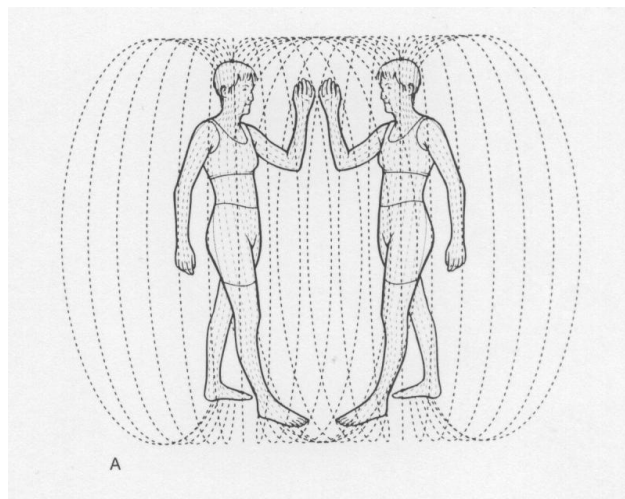


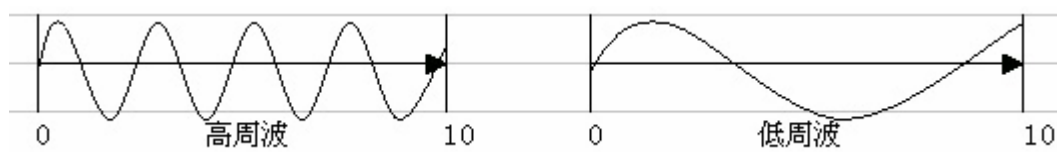
図 10

人と人の脳波または心拍の同調化がエネルギー療法を可能し効果を高める。
エネルギー療法：フラワーエッセンス・セラピー、ホメオパシー、音および光療法、水晶
治療法、鍼、電気針、カラーパンクチャー、瞑想（フリーラン状態に入る）

臨床の応用：

リハビリテーション：

電気：低周波（5～1000Hz）刺激療法の目的は鎮痛、筋力増加、痙攣抑制、廃用性筋萎縮予
防、骨治癒促進、 温熱作用はない。高周波は温熱効果がある。



レーザー効果：熱作用、光作用、圧力作用、電磁場効果（組織のイオン化、遊離基の発生
など）。

電磁波の効果：電磁波は進行方向に対して垂直に電位の変化のある横波です。

短波 3～30MHz, 超短波 30～300MHz, 極超短波 300～3000MHz,

医療用には主に 2450MHz を用いる、温熱効果がある。

音波（縦波で電磁波ではない）：超音波療法はエネルギー変換熱による温熱療法です。さら
に機械的振動のエネルギーが出力される。

紫外線（ビタミン D 合成作用や殺菌作用）、赤外線（温熱作用）など。

検査機器：超音波, MRI, EKG, EEG, EMG, MEG, 分光光学（photospectroscopy）

参考のため電磁波の種類（図 11）を見てください。

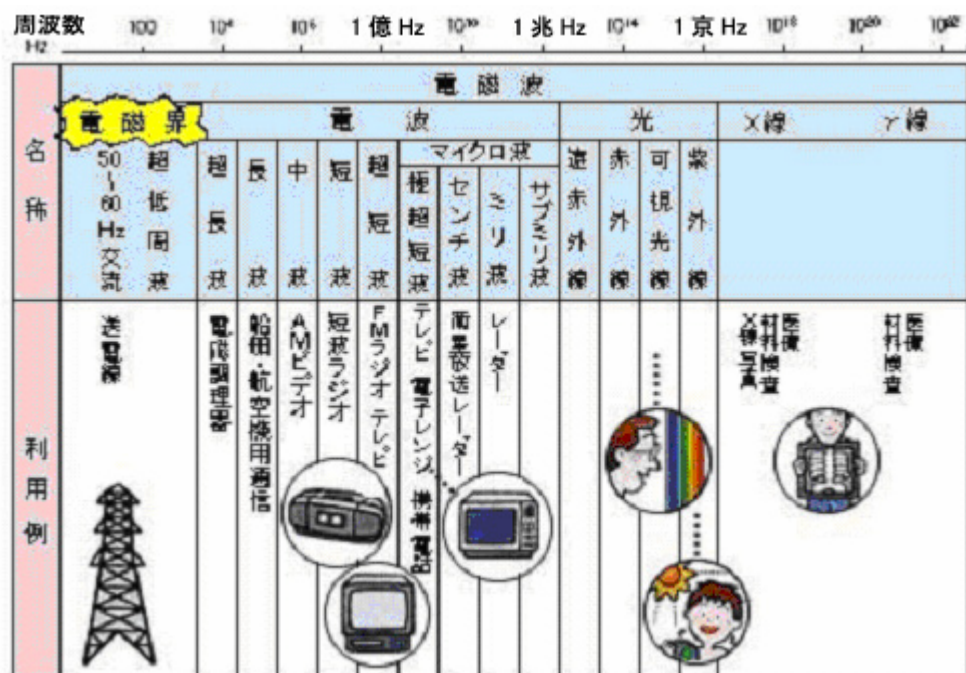


図 11 電磁波の種類 (<http://electromagnetic-wave.net/>)